

ローザンヌ大学留学記

——中世教皇庁研究の一年——

藤崎 衛

キャンパス内を流れる小川に架かる木造りの小さな橋には「乗馬による通行禁止」の標識が掲げられ、図書館の裏側の窓のすぐ外にある目の高さの草地では時おり放牧されている羊や牛が草を食む姿を見ることができる。スイスのローザンヌ大学(Université de Lausanne)である。大学は市街地から地下鉄で 10 分ほど離れた静かな郊外に位置していて、連邦工科大学(Ecole polytechnique fédérale de Lausanne)が隣接している。キャンパスからは、レマン湖とそのかなたに連なるフランス・アルプスを一望することもできる。スイスのヴォー州(Canton de Vaud)の州都であるローザンヌは、邦訳に『アドルフ』などがあるフランス革命期の作家にして思想家・政治家でもあったバンジャマン・コンスタン(Benjamin Constant / 1767-1830)の生地でもある¹。以下これから記すのは、このローザンヌにおける 2003 年秋から 2004 年夏にかけての留学の報告である。ことわるまでもなく留学というのは人それぞれで一様ではない以上、一大学院生の個人的経験は一般化できる性質のものではない。ましてスイスという小国となれば、日本の西洋史研究者が留学先に選ぶケースとしてはきわめてまれであろう。

留学に至るまで

そもそもなぜ留学先をスイスのローザンヌに決めたのかについて述べておきたい。私の研究対象は中世のローマ教皇庁であり、スイスという国で研究をしなければならない必然性はなかった。スイスを選んだのは、ローザンヌ大学に私の研究対象分野で数多くの業績をあげている先生がおられたからである。中・後期中世の教皇庁研究の泰斗アゴスチーノ・パラヴィチーニ=バリアーニ(Agostino Paravicini Bagliani)教授である(以下パラヴィチーニ先生と呼ぶ)。2004 年から 2007 年までの 3 年間、国際学士院連合(Union académique internationale / International Union of Academies)のプレジデントも務めておられる²。この先生のもとで中世教皇庁の研究を深めるのを目的としたのである。なお教皇庁研究を目的とする留学先に関して触れておけば、確かに教皇庁の所在地であるローマにはヴァチカンの図書館および文書館があるばかりか欧米各国のインスティテュートが集中しており、第一級の研究拠点だということは否定すべくもない。しかし実際には専門家の多くは欧米の諸大学に分散しているため、留学などにより学問的訓練を受けようとするなら、自らの研究手法やテーマに合わせてローマ以外の地を選ぶほうが場合によってはより好ましい成果を得られるだろう。特にドイツの諸大学では、皇帝権との深い関係性ゆえに中世の教皇権は常に重要な検討対象となっていて、講義やセミナーのテーマとして頻繁に取り上げられている。

留学に先立つおよそ 1 年半前、私はまず先生に直接連絡を取って面識をもとうと試みた。インターネット上で、フランスはポワチエでの研究集会の開催とそこでパラヴィチーニ先生が講演を行うということを知り、ならばそれに出席して先生に直接面会できは

しないだろうかと考えたのである³。さっそく手紙を書いて先生に送ったところ、それが届いたであろう直後、電子メールによって返事が寄せられた。当の研究集会のときにぜひとも話をしましょうとのことだった。話すべきことをいろいろ思案し、フランス語で会話が成立するよう必死で用意した。枢機卿団の研究、教皇庁(クリア)の移動性など⁴、私が修士論文で扱った12世紀教皇庁をめぐる研究上の諸問題について話し合うことができた⁵。

インターネットの発達した現在においては、世界中の研究者の連絡先が大学や研究室のウェブサイト上で公開され、たいていは電子メールのアドレスまでも知ることができる。日本の学生としては、ヨーロッパから遠く隔てられているという地理的ハンディがあることを考えれば、場合によるだろうが思い切って電子メールで接触をはかってみても歓迎されるかもしれない。信頼にたる日本人研究者の紹介状を得ることができれば接触のしやすさは格段に高まるはずである。私の場合、相手の先生がそのような接触を喜んで受け入れてくださる方であったことが幸運であった。いずれにしても、現在では留学する前に学会への参加や史料調査などで渡欧した際など、現地の研究者と接触をもつことはさほど困難ではなくなっているといえるだろう。

留学資金に関しては、僥倖に恵まれてスイス政府給費奨学生に選ばれたことにより、スイスで大学生活を過ごすためにまず間に合う程度の資金を得ることができた⁶。国費を支給されるということもあり、留学の手續にあたっては書類の作成に追われたりあれこれ奔走することはなくすることはほとんどなく非常にスムーズに進んだのであるが、たいていの留学生が味わうビザ取得や留学手續の苦勞を知らないというのはもしかするとある意味で不幸なのかもしれない。住居は別の日本人留学生の助けで駅からすぐのアパルトマンを得た。4階(日本でいう5階)のIDKで、窓からはレマン湖とアルプスを望める物件である。物価はヨーロッパの中でも比較的高い方で、食事は常に自炊を心がけた。通貨はスイスフランであるから、周囲のヨーロッパ諸国に足を伸ばすたびに両替をしなければならない。

語学について

留学生活において避けて通れないことの一つに、言葉の問題がある。私は大学で研究するのに十分なフランス語を身につける必要があると政府に判断され、語学研修が義務づけられた。そのため新学期が始まるまでの3ヶ月間は、スイスのほぼ中央に位置するフリブール(Fribourg)でのフランス語研修に費やされた。それまでフランス語の習得はほぼ独学だけによっており、また専門の書物や論文を「読む」だけで事足りていただけに、フランス語の会話および作文のみならず文法についても多くを学ぶ機会を得ることができた。

ここでついでにスイスの言語状況についても簡単に触れておきたい。よく知られているとおり、スイスは独・仏・伊・ロマンシュ語の四つの言語が公用語であり、日常のサービスでは英語も普通に使用されている。たいていの書類では、独・仏・伊・英が併記されている。人々もたいてい二ヶ国語かしばしばそれ以上に通じている。ローザンヌの中世史の研究室の場合、このような多言語環境はいつそう特徴的であった。中世史の講義やセミナーはすべてフランス語ではあったが、教授のパラヴィチーニ先生がイタリア

のベルガモ出身ということもあって、イタリア語を母語とする学生が他のセクションに比べて多いように感じられた。スタッフのベルナール・アンデンマッテン(Bernard Andenmatten)先生はフランス語を母語とするが、その姓から予想できるとおり、スイスでもドイツ語圏の家系の出身であり、実際ドイツ語でよどみなく会話することができる。一般的にスイス人には母語を異にする親戚がいるのはなんら不思議なことではなく、たとえばローザンヌでフランス語をしゃべっている家族がチューリヒにある親の実家に帰ればみなドイツ語でしゃべり始めるなどということはよくあることのようにだ。前年度講師を引退されたアンスガールはもともとドイツ語圏の出身で、パラヴィチーニ先生とドイツ語で会話することもしばしばであった。研究室助手のエヴァはフランス語、同じく助手のプリスカはイタリア語をそれぞれ母語としている。彼女たちは普段はフランス語で会話しているが、そばで聞いているとその会話がいつの間にかイタリア語になり、またしばらくするとフランス語に戻るといふ、なんとも奇妙な会話が繰り広げられるのをよく耳にしたものである。

授業はすべてフランス語だと述べたが、卒論準備生や博論準備生および助手や先生方も多く加わっての専門性の高いセミナーでは、たとえばピサ高等師範学校(Scuola Normale Superiore di Pisa)のラッザリーニ(Isabella Lazzarini)先生の講演で半分以上がイタリア語となってしまうという事態も生じた(史料が中世イタリア語だったのが主たる理由であるが)。しかし私を除くほとんどの参加者は内容を理解していたようで、講演者の冗談にも笑って応じていた。

先に述べたとおり教皇庁史研究の専門家たちは欧米各国に散らばっており、この分野の研究をフォローするためには独・仏・伊・英いずれも必須であるため、スイスの多言語環境は私にとって言語の訓練という点でも有益であった。新学年開始直後のこと、先生からまず読むよう指示されたのはドイツ語の本であったが、私が「ドイツ語は読むのに時間がかかりますが…」と率直に述べたところ、「ドイツ語の文献をすらすら読めるようでないで教皇庁の研究なんてできないぞ」と脅しに近いことを告げられ、身の引き締まる思いをしたことがありありと思い出される。

図書館

スイスの大学は、国立(連邦立)のチューリッヒとローザンヌの連邦工科大学を除けば州立であり、大学図書館は同時に州立図書館でもある。そのため一般市民も自由に閲覧・借り出しが可能である。ローザンヌ大学の場合、ほぼすべての専門書・雑誌類が、一部社会科学系のものを除いて、一つの建物内に集中的に収蔵されている。このために使いやすさは格段に優れている。立ち入ることができない書庫に収められているものも多くあるのは確かであるが、館内の端末や用紙で注文すれば30分以内で書庫から出されるし、自宅などからでもインターネットを通じて図書を取り置いてもらうサービスも利用できる。そしてなによりも、一箇所ですべて必要な資料を参照できるという利点が非常に大きい。

ローザンヌ大学、ジュネーヴ大学、ヌーシャテル大学、フリブール大学のそれぞれの図書館は、スイス・ロマンド(フランス語圏スイス)における図書の相互貸借ネットワークが構築されており、これらの図書館からは自分が登録している図書館まで無料で図

書を届けさせることができる。またスイス・アレマニック（ドイツ語圏スイス）の図書も所属の図書館を通じて借り出しが可能である。ただしこの場合には送料が請求される。私は特にドイツ語文献でバーゼル大学やチューリッヒ大学の図書館の世話になった。バーゼル大学図書館には実際に数度足を運んで、稀観書の閲覧室で史料を参照することもあった。

ただし、西洋史学全般についてあてはまると思われるが、文献の充実の程度は、率直に言ってスイス全体よりも、むしろ日本の首都圏の大学図書館群の方が質・量ともに上回っている。もともと、20世紀初頭以前に刊行されている史料・専門書で日本で閲覧することが不可能なものが、ヨーロッパだとあっさりアクセスできるという場合はある。

中世史講座と授業

ローザンヌ大学では歴史学科及び中世学研究所(Institut d'études médiévales)に受け入れられた。正規の学生として学生証は発行されたが、大学院生という身分としてではない。むしろ、指導教官のもとで研究をおこなう研究生のような特殊な身分とされた。このため私は単位をとる必要もなく、関心のある授業に自由に参加させてもらうだけで十分という資格をあくもなかった。このようにスイスの諸大学、特に人文科学系の学部では、日本やアメリカのような大学院制度は整っていない。スイス・ロマン드의諸大学の文学部では近年になっていくつかの学科が博士準備課程(DEA課程)のシステムを導入したが、これもごく少数の学科に限られ、歴史学科を含め大部分にはこの課程は備わっておらず修士号も存在していない。日本に比べて学歴がさほど重視されないスイスにおいては博士号の取得を目指す学生はきわめてまれであるが、希望する人は博士候補生(doctorant)の資格を得て博士論文の執筆に取り組む。ただし正規のカリキュラムがないので、指導教官のもとでもっぱら個人的な指導を受けることになる。また博士号の取得を目指さないが研究をもう少し深めようという学生はある程度存在し、彼/彼女らは(博士候補生も同様であるが)通常は助手に採用してもらい、研究室の事務・教務的仕事を補佐しつつ自らの研究を続ける。中世史研究室のたいていの助手たちはこの間、卒業論文を発展させて専門書の刊行にまでこぎつける。また研究室が関与する学術雑誌や論文集の編集などにも従事し、ティーチング・アシスタントのように授業を受け持つこともある。しかし彼/彼女らにとって研究職のポストを得るのは日本以上に困難であり、高校の教員や各地の文書館職員など専門性を活かせる職につく場合が多い。

私の所属したローザンヌ大学文学部歴史学科の中世史講座では⁷、学生の研究テーマとしては、ローザンヌ周辺の都市や農村、修道院についての実証研究、地理的範囲をさらに広げたサヴォア伯領・サヴォア公領の研究、また魔女狩りや魔術(sorcellerie)の研究などが人気がある。

単位取得の必要性はなかったもので、ある意味気楽な気分で中世史の授業はいくつか受講してみた。アンデンマッテン先生の講義は、中世史研究にあたって必要な技術について論じられ、中世ラテン語のパレオグラフィーが中心的な検討課題とされた。専門性の高い授業で、形式上は講義とされていたものの、パレオグラフィーの練習としてオリジナル史料の写真版を転写するという宿題が毎週必ず課された。私は日本でわずかながらもパレオグラフィーのトレーニングを受けていたため、最初の頃は周囲の学生よりもよ

く読めていたのであるが、彼らが数週間・数ヶ月と経つうちにみるみる私を追い越してスムーズに読めるようになるというには驚き呆れたものである。この講義では、そのほかに、貨幣学、中世ラテン語、ディプロマティック、暦学、印章学、さらに文書館論、史料類型論など歴史学にとっての補助科学がコンパクトではあるが体系的に教授された。

パラヴィチーニ先生の授業は、一学年のうち、前半が講義で後半が担当する学生の報告という変則的な形態をとっていた。2003/2004年度のテーマは「中世における政治的訴訟」というものであった。ボニファティウス8世、テンプル騎士団、ジャンヌ・ダルクなどに対する訴追のロジックと、それらの文脈を踏まえての中世後期までの異端論、魔術論、女性蔑視や魔女訴追の問題が扱われた（ただし中世の知的エリートのディスクールが主たる検討対象とされた）。ボニファティウス8世については最近パラヴィチーニ先生本人が著した本が参考になる⁸。魔女や魔術の問題は、10年以上にわたってローザンヌ大学における重要な研究対象となっていて、講師のカトリーヌ(Catherine Chène)やマルティーヌ(Martine Ostorero)がそれぞれ講義やセミナーを開いている。

学生の報告には、周到な準備が要求された。学生による報告は計15回あり、毎回二人一組が一つのテーマを担当する。なお発表までの準備および発表の仕方は徹底して指導が行われたので、ここに簡潔に書きとめておきたい。報告担当者は教官（この授業では講師のカトリーヌがあらゆる点で教授を補佐する役割を果たした）とできるだけ早いうちからの緊密な連絡、そして1週間前までに報告原稿の提出が求められる。原稿はA4用紙で15枚程度の分量が必要である。レジュメは報告計画、文献目録、史料の引用が中心となる。なお紙資源の節約のためにレジュメは用紙の両面に印刷される。授業では、報告が45分間で、残りは議論のために割かれる。

パラヴィチーニ先生が口を酸っぱくして繰り返言われたことは、歴史家による評価や研究者の言説を軸に据えて議論を組み立てるのではなく、あくまでも史料が何をどのように語っているかの批判的検討を徹底しなさい、ということであった。したがって、研究史や概略的通説をなぞることに報告の重点が置かれようものならば、史料のテキストに歴史を語らせるようにと、直ちに先生からの注意がかけられたのである。

報告が済めばそれで終わりというわけではない。担当者たちは、翌週までに報告の要点をレポートの形であらためて提出しなければならないのである。もちろん授業での議論が反映されていなければならない。

セミナーでの報告についての以上のような指導を通じて、学生が研究者の道へ進まなくとも（実際研究を続けようという人はほとんどいないのである）、一般に文書やデータを調査・処理するにあたっての歴史学的な思考方法を涵養するという点で、またプレゼンテーションや討論の技術を磨き上げるための訓練を与えるという点で、歴史学が教育面で果たすべき役割を実行している現場に立ち会うことができた。おそらく日本の大学ではこのような指導・訓練というのはまだ不十分ではなかろうか。

パラヴィチーニ先生やアンデンマッテン先生の授業では、古文書館などを訪問することもしばしば行われた。バーゼルでは大学図書館で写本研究家の話を聞いたり、紙博物館で紙を作りもした。文書館はローザンヌ、フリブール、シオンのそれらを訪ね、アルシヴィストの解説を聞いたり、パレオグラフィのテストを課されたりした。ローザンヌの大聖堂では墓碑銘を読む実習もあった。また一度は、スイスのほぼ西端に位置する

ローザンヌから東はボーデン湖に近い、つまりはドイツやオーストリアの国境からさほど遠くないザンクト・ガレンまで行き、修道院図書館などを見学するのを日帰りで強行するということがあった。このようなエクスカッションでは勉強も重要ではあるが、それぞれの土地でその土地ならではの雰囲気や料理や酒を味わうのも、皆にとって楽しみの一つであった。ドイツ語圏のレストランで注文するときはみながんばってドイツ語を駆使するのであるが、ウェイターはこちらがフランコフォンだとふんで、フランス語で返してきたりする、奇妙なねじれが生じるのもしばしば見ることができた。もっともスイス・アレマニックのドイツ語はチューリッヒやバーゼル、ザンクト・ガレンなど地域によってその違いが非常に大きいとのことであり、ドイツの標準ドイツ語でコミュニケーションを図ろうとしてもうまくいかないこともあるようだ。一度私が電車の中で遭遇した場面では、たまたま隣り合わせたジェルマノフォン同士がドイツ語で会話して、会話を成立させるのに何度も聞き返したり説明しなおしたりして四苦八苦していた。その場ではさらに私が下手なドイツ語で口を挟んだりしたので、滅茶苦茶な電車の座席になってしまった。

授業ではほかに、ジュネーヴ大学のティエット(Jean-Yves Tilliette)教授によるソールズベリのヨハネスの『ポリクラティクス』論、アンデンマッテン先生の臣従礼の儀礼的解釈などのほかに、ローザンヌを特徴づけるような講義としては、パリ第10大学のブデ(Jean-Patrice Boudet)教授の占星術論、カトリーヌやマルティーヌのサバトや魔女狩りについての講義、講師のデュビュイ(Pierre Dubuis)先生の老化についての講義などがあつた。後者の諸講義は、ローザンヌの中世史講座が事務局となっていて中世の自然科学や魔術についての論文を収める『ミクロログス⁹』誌の傾向を反映しているといえるだろう。

教皇庁研究

私のスイス滞在中の研究は、もっぱら指導教授との不定期のプライベートな討議をもとに進められた。留学中の研究テーマの設定については、数度の議論を経た結果、13世紀の教皇庁財政について調査することになった。先生の以前から関心あるテーマの一つとして教皇庁における贈与のシステムの解明ということがあつたようである。私は特に、教皇に直属する司教や大修道院長がその任命ないし叙階に際して義務を負った税(セルヴィツィア[servitia]と呼ばれた)について、その実態を明らかにしようと調査を開始した。主要史料は、教皇書簡の記録簿(*Registres et lettres des Papes du XIII^e siècle*, 32 vols, Rome 1883-)である。管見の限り、日本ではこの史料は上智大学中世思想研究所が一部所蔵しているのみである。刊行されたのが19世紀末から20世紀初頭にかけてかけてということもあるので、この史料集へのアクセスは難しい。しかし現在ではCD-ROMおよびウェブ上(有料)でこの史料にアクセスすることができるようになっている¹⁰。ただし残念ながら、おそらく日本においてこの史料にアクセスすることのできる大学はないと思われる。

また留学中にヴァチカンの古文書館に数日間通うことができた¹¹。これは13世紀末以降のセルヴィツィア研究の基礎資料をなす『債務支払誓約記録簿(*Obligaciones et solutiones*)』という史料を閲覧するためである。マイクロフィルムでの閲覧を余儀なくされたが、これは原史料の傷みがひどいため、まとまった形で刊行史料として活字化さ

れていないのもそのせいである。なお、この留学中の調査の成果は論文の形で発表できるよう目下準備中である。

最後に

スイスへの留学はいくつもの利点があった。言語についてはフランス語のほかにも独・英・伊の各語に接する機会がある程度あったこと、また地理的には独・仏・伊に接しているので資料調査や学会でこれらの国に行くことが比較的容易ということなどである。これらは多少物価が高かったり、EU に加盟しておらずそのため外国ではユーロに両替しなければならないなどという不便さを補うだけの価値がある。

やはり留学のメリットは、専門書や雑誌論文が発表される以前の本場ヨーロッパの学界の動向や専門家たちのヴィヴィッドな議論、若手研究者たちの関心を間近に観察することができるということであろう。もっとも当地の研究スタイルに染まりきってしまうのは、それはそれで問題である。日本人として西洋史の研究に従事することの意義を反省することは不可欠である。留学先ではいく度となく「なぜ日本人のお前が中世の教皇庁を研究するのか」という質問を浴びせられた。これまで留学を経験した日本人の西洋史研究者を煩わせてきたのと同種のものであろう。質問する側は深刻な意図はないのかもしれない。またこの種の質問は覚悟していたから、それなりの回答は示してきた。しかし、今に至るまで本当に自分が納得できる答えはできずじまいである。ただ、留学によってこのような問いにあらためて直面させられたのは得がたい経験だと考えている。そしてさらに翻って、ヨーロッパの研究者たちの人柄や彼らの交流、その発言にじかに接することにより向こうの学界を客観化できるようになったということ、これもまた留学の実りなのである。

また研究そのものばかりではない。普段から教会の脇を通ったり美術館や博物館にふらっと立ち寄ること、人々と会話すること、気候や食事など日本と異なる風土の中で暮らすこと、これらのことが史料に向き合うことと並んで、ヨーロッパを知りヨーロッパの歴史を知ることにつながっている。

今後も西洋史を専攻する日本の大学院生がヨーロッパの研究機関で調査を行い、また留学する機会は増え続けるだろう。日本とヨーロッパの西洋史研究者の間での知的・人的な交流がより活発になり、日本人の研究のレベルが向上することを期待する。

《註釈》

- ¹ ローザンヌ大学には、バンジャマン・コンスタン研究所(Institut Benjamin Constant)が付属している。次のウェブサイトを参照、<http://www.unil.ch/ibc/>
- ² 国際学士院連合(ウェブサイトは<http://www.uai-iaa.org/>)には、日本学士院もメンバーとして関わっている。
- ³ これは身体についての研究集会であった。パラヴィチーニ先生の主著の一つとして、E. カントーロヴィチ『王の二つの身体』(邦訳として小林公訳、平凡社、1992年；ちくま学芸文庫、2003年)に触発され中世の教皇の身体について論じたものがある。Agostino PARAVICINI BAGLIANI, *Il corpo del papa*, Torino 1994 (仏訳: *Le corps du pape*, Paris 1997; 独訳: *Der Leib des Papstes*, München

1997; 英訳: *The Pope's Body*, Chicago 2000) . なおこのポワチエでの集会にはアラン・ブーロー氏(Alain Boureau)やジャン=クロード・シュミット氏(Jean-Claude Schmitt)らが顔を連ねており、パラヴィチーニ先生がフランス文化史家たちと密な交流をもっていることを垣間見ることができた。研究者間の人的な交流は、留学することによってより詳しく観察することができる。

⁴ 教皇庁(クリア)の移動については、2003年に次の論文集が出版された。 *Itineranza pontificia. La mobilità della curia papale nel Lazio (secoli XII-XIII)*, a cura di Sandro CAROCCI, Roma 2003. パラヴィチーニ先生のかつての移動する側のクリアに重点を置いた論文の再録に加え、教皇が訪れたアーナーニやヴィテルボなど都市の側に重点を置いた論考、各地に建設された教皇宮殿についての論考などが、これまでにない視点を提供している。

⁵ 受け入れを快諾してくださってパラヴィチーニ先生はもちろんのこと、推薦状を書く労をとってくださった樺山紘一先生(前国立西洋美術館館長)および指導教官の高山博先生(東京大学教授)に深く感謝する。

⁶ スイス政府奨学金については、在日スイス大使館のウェブサイト中の次の箇所を参照のこと。

http://www.eda.admin.ch/tokyo_emb/e/home/scite/announcement.html

⁷ 参照, <http://www2.unil.ch/hist/med/>

⁸ Agostino PARAVICINI BAGLIANI, *Boniface VIII. Un pape hérétique ?*, Paris 2003 (伊訳: *Bonifacio VIII*, Torino 2003) .

⁹ *Micrologus. Natura, scienze e società medievali. Nature, Sciences and Medieval Societies*. 次のサイトを参照, <http://www.sismelfirenze.it/micrologus/>

¹⁰ Brepols 社から *Ut per litteras apostolicas* として出された、フランス国立科学研究センター(CNRS)の Institut de Recherche et d'Histoire des Textes および École française de Rome の Brepols によるデータベース。詳しくは次を参照, http://www.brepolis.net/pl_en.html

¹¹ ヴァチカン文書館(Archivio segreto vaticano)については次のサイトを参照, http://www.vatican.va/library_archives/vat_secret_archives/ 7月半ばから9月半ばまでは閉館しているので注意を要する。